

第二十話 蔵書処分の最終形態「一人古本市」挙行！（上）

●このままでは本が嫌いになる

地下の書庫がいよいよ收拾がつかない事態となってきた。床が見えないほど散乱した本や雑誌。その上を踏んで歩かねばパソコンのあるデスクにたどりつけない。かんじんな本が見つからないことは、もはや当然で、自分の書評記事を貼付けて保存しているスクラップブックも、どこかへまぎれてしまった。

あれがない、これがない。そんな徒労と思える検索にもうんざりしてくる。それでも日々、本は降り積もるように増え続ける。

このままでは本が嫌いになりそうだと思った。それだけは避けたい。自分がよって立つべき存在意義がなくなってしまうからだ。そこで、蔵書の大量処分を考えた。これまでも何度か、数千冊単位で処分をしてきたが、きりもない。古本屋さんに本を処分するために本を買っているのかと、思われるほどだ。

そこで考えた。古本屋さんに処分するのではなく、自分で売ってみよう。

普通なら、ネットに出品して、そこそこの値をつけて販売するというのが、素人ができる常套手段だ。しかし、パソコンの扱いもままならず、長期間の手間と時間を擁するネット販売は、どうも自分には合っていない。しかも、蔵書の減量は緊急を擁する。

ならば、自分一人で「古本市」を開いたらどうか。つまり、私がひんぱんに参加してきた、素人が参加して、路上で古本を売るフリマ形式の「一箱古本市」を、一人でやってしまうということだ。古本屋さんを通さず、短期間で蔵書を減らすには、これがいいと考えた。

●前代未聞のイベント「羽鳥書店まつり」

この「一人古本市」には、すでに前例があった。二〇一〇年の十一日から十四日の四日間、東京・駒込にある「光源寺」という名刹の境内で、個人の蔵書を一挙放出して販売するというイベントが挙行されたのだ。もちろん前代未聞のことだった。その個人とは、東京・千駄木にある羽鳥書店という出版社の社主・羽鳥和芳さん。

「羽鳥書店」は、長く東京大学出版会に勤めた羽鳥さんが、定年退職後に起ちあげた出版社だ。山口晃『すゞしろ日記』、高山宏『かたち三昧』、長谷部恭男『憲法の境界』など、人文書の分野で注目すべき出版物を連打し、その名を知られている。その羽鳥さんに、ただ一つ、頭を悩ます懸案事項があった。以下、「羽鳥書店まつり」をバックアップした千駄木の古書店「古書ほうろう」のブログから。

「それは羽鳥社長の蔵書問題。『酒も博打もやりません。ともかく本を買うのが好き。』という羽鳥さん。往来堂書店の箕入店長をして『毎日みえて、毎日お買い上げになる』と言

わしめるその蔵書は、日々増え続ける一方。結果、引越先のご自宅は二百箱以上のダンボールで埋め尽くされ、このままではご家族との同居もままなりません。『一旦すべて売ってしまおう』と決断されたのもむべなるかな、暮れも押し迫った一日、はじめてお宅に伺うことになりました」

蔵書処分を請け負ったのが「古書ほうろう」。平成十年に二組の古本好きカップルによりオープン。広い店内に人文書からサブカルチャーまで、広い分野をフォローし、本好きに認知された古書店。この地域で開かれる「一箱古本市」の勸進元であり、店内で数々のトークやライブのイベントも開いている。

その「古書ほうろう」が、いざ羽鳥家に買取に行った、その続きを、店主の宮地健太郎さんは、続けてブログにこう書いている。

「拝見したのは積み重ねられた箱のほんの一部。でもそれが自分の買うべきものであることはすぐわかりました。単に良い本がたくさんあるということではなく、その目配りの広さがうちの店に向いていたので、が、しかし」

その「が、しかし」の中身を知るために、直接、宮地さんに話をうかがった。

「いや、見たのは一部ですが、本当にみんないい本だったんですよ。羽鳥さんは、近くの書店『往来堂』へ毎日のように通って、どんどん本を買っていく。本を見て、選んで、買うことそのものを、出版という仕事の活力にしていこうという感じで、だから、けっこう未読の本も多い。ダンボールを開けたら、書店の袋に入ったまま、なんて本もありました」

処分先を「ほうろう」に決めたのも、「往来堂」の笈入店長に「本が増え過ぎて困っている」と相談したところ、「古書ほうろう」を紹介されたそう。往来堂と「ほうろう」は、日ごろ「一箱古本市」などを一緒に運営する、地元のチームみたいなものだ。

「羽鳥さんの蔵書を見て、欲しいのは欲しいが、これを全部、うちで評価して支払いきれいな、と思いました。ほかの店のことはわかりませんが、うちは、買取の場合、一冊一冊、評価していくんです。一万冊をそんなことをしていたら、いつまでかかるかわからない。経済的なこともありました。それで、頭を悩まして、一旦はあきらめかけたんです」

ダンボール二百箱もの本を収容し、店内でさばっていくのは「古書ほうろう」の規模ではたしかに荷が重いだろう。古書籍組合に加入していれば、業者の市場が利用できるから、そちらへ持ち込むこともできる。だが、「古書ほうろう」は組合未加入だった。

そこで思いついたのが、羽鳥さんの蔵書に値をつけて、そのまま一般の人に買ってもらうという破天荒なイベントだった。場所は、「一箱古本市」で会場を提供してもらった経験のある「光源寺」。ここでは、毎年「ほおずき市」が開かれていて、その備品もノウハウもある。お寺の住職夫婦と宮地夫妻は親交があった。羽鳥書店の承諾も得て、ことは動き出したのである。

●まさしく「まつり」だった

引越し先から新居に運び込まれた、未開封のダンボールの蔵書を、三トン車で二往復。光源寺の蓮華堂へ一万冊の移動が始まった。それが「羽鳥書店まつり」と名づけた、一人の蔵書による古本市開催の一週間前。「古書ほうろう」は、一緒に経営する山崎哲・神原智子夫妻（この二人は、現在、「ほうろう」から独立し、「古書信天翁」を経営）にまかせ、蓮華堂にこもり、ひたすら値付けをする宮地さんだった。

「短期間で本をさばくには、とにかく驚く安い値付けにしないと駄目。一冊一冊、値踏みしては作業が進まない。だから一〇〇円、五〇〇円、一〇〇〇円の三パターンにしました。羽鳥さんには、事前に、業者の市場へ持ち込んで評価するよりは、少し総額は低くなることを了解してもらいました」

値付けは、とにかく会期中に売り切ることを目標に、安め安めにつけたという。「がまんして安くつけた」とは宮地さんの表現。つまり、本の値打ちを考えれば、もう少し高くつきたいところだが、ここは安く、というくり返しだった。「五〇〇円か一〇〇〇円か迷ったら、とりあえず五〇〇円」というシステムで、とにかく本の山を切り崩しながら値付けしていった。

宮地さんには考えがあった。単に本を処分するだけではなく、この「古本市」を通して、千駄木に居を構えた「羽鳥書店」を認知してもらおう。また、それをみんなで歓迎しよう。そんな意味を込めて「まつり」と名づけたのだ。まさに、それは「まつり」となったのだ。

「古書ほうろう」を始め、「羽鳥書店」社員、「往来堂」の笈入店長、千駄木ストリートで「一箱古本市」を実行するスタッフ、「わめぞ」と呼ばれる早稲田「古書現世」の向井さんを始めとするメンバー、それに地元の「顔」である編集者でライターの南陀楼綾繁さんなど、延べ総数五十名近くが、この「まつり」の趣旨に参道して、運営を手伝った。

本の扱いには慣れたスペシャリストが集結して、光源寺の境内、「ほうずき市」の時には花が並ぶテント下には、びっしりと本が並んだ。初日の人出はすごく、オープン前に結界として張られたロープのまわりに、ずらり電線にカラスが止まるように人が取り囲んでいたという。

●壮絶な奪回戦

初日にいたっても、まだ宮地さんは本の値付けをしていた。

「助かったのは、羽鳥さんが買っていたのがすべて新刊書で、しかもここ二十年くらいに出た新しい本ばかりだったこと。ここに『古書』と呼ばれる、レアもの、評価の難しいものが入っていたら、値付けはもっと大変でした。あと、本がみんなきれいで、普通なら本の埃をはらったり、カバーを拭いたり、またはブックオフなどの新古書店のシールをはがしたりする、その手間がいらなかった」

それでも一万冊の処理は大変だった。値付けをする一週間のあいだにも、羽鳥さんが毎日のように、作業をする宮地さんのもとを訪れては、「やっぱりこれは残しておこう」と、

未練のある本を次々に確保していったという。それがあまりにひんばんなので、宮地さんとの間に緊張する瞬間もあった。

『「いい加減にしないで！」とは言いませんが、値をつけたそばから持っていかれると、やっぱりね（笑）」

しかし、羽鳥さんの気持ちも大いにわかる。なにしろ、これまで買ってきた蔵書を、自分のチェックなしに、すべて売り払おうと言うのだ。火事や災害により、一晩で失ったというなら、まだあきらめもつく。しかし、現物はそこにあるのだ。しかも、長い間封印していた箱から、「あ、こんなの買っていたんだ」とか、「あ、ここにあったのか」というような本が次々と出てくる。

羽鳥さんは、買ったのはいいが、未読の蔵書もけっこうあったようだ。いや、一万冊あれば、当然の話だ。それが買ったときの記憶そのままに、また目の前に現れたら、それがまだ自分の本だから無料だとすれば……これは煩惱がうずくのもあたり前ではないか。

「羽鳥さんは、古本市が始まってからも、まだ残しておきたい本を抜いておられました。結局、二十箱ぐらいは、そうして自分の手許に置かれておいたと思います」と宮地さんは苦笑まじりに話す。

初日に並んだのがすべてではなく、待機していた本が、売れるたびに補充補充と、見るものにはつねに新鮮な品揃えになっていた。羽鳥さんの本は、哲学・歴史などの人文書は文芸書、それに芸術全般、マンガや雑誌もあって、非常に玄人好みの部分もあれば、一般の人が安く買えたらうれしいという本もあった。

「始まる前は、どれくらいのお客さんが来てもらえるのか、どれくらい売れるものか見当もつかなかった」と宮地さんは言う。四日間の会期中、毎日通ったお客さんも多く、また偶然通りかかって、本を買っていったお客さんもいたようだ。

結果、驚くべきことだが、用意した一万冊のうち、九割五分を売り切ったという。通常のプロが開く古本市の消化率がどれほどかわからないが、まあ、半分売れば、かなり売れた方に入るのではないだろうか。羽鳥蔵書の質の高さと本の状態の良さ、宮地さんの値付けの巧さ、それに本に精通した腕利きのスタッフを取り揃えたことなどが勝因だろう。

残った本のうち、十箱ほどを「古書ほうろう」が引取り、あとは「わめぞ」のメンバーである岡島書店さんが処理を引き受けた。かくて、一万冊蔵書販売イベントは、みごとに成功を収めたのである。

●掘りごたつのある民家ギャラリー

私も初日に「羽鳥書店まつり」を訪れ、その熱気を経験していた。一〇〇円、五〇〇円、一〇〇〇円と、値段別に本を並べたテントが分かれています、「争奪戦」ということばがぴったりするような、すさまじい買う「気」同士の衝突がそこかしこで見られた。

まだ底冷えのする二月の冷気を打ち払う熱気が会場を浸していた。帳場にはたちまち客

が殺到し、お金を払って帰るかと思えば、後ろ髪を引かれるのか、また戦場へ戻っていく客もいた。先着で、羽鳥書店特製の金太郎飴が配られる。甘酒も配られていた。売る側も買う側もみな上気している。くり返しになるが、それはまさしく「まつり」であった。

蔵書の処分法として、こんなことが可能なのか。その驚きは新鮮で衝撃的なものだった。しかし、そこに至る準備やスタッフの召集を考えると、自分でやってみようとは思わなかったのである。羽鳥さんは数々の困難な状況をあっさりクリアする、あまりに恵まれた環境にいた。これは、思いついて、誰もがすぐにできることではない。

しかし、私にもチャンスがめぐってきた。

私が乗り降りする、最寄りの中央線「国立」駅からすぐのところに住んでいるのが十松弘樹くん。長らく、出版取次の仕事をしていたが、五十一歳でリタイアした。彼の実家はもともと駅前で銭湯を経営していたが、昭和四十年代に店を閉じた。その跡地に二世帯住宅と、古い民家を所有している。

考えてみれば、銭湯は広い敷地を擁するから、跡地に二軒、住宅を建てることも可能なわけだ。その古い民家の芳は、築半世紀にもなろうという木造二階建てで、ずっと人に貸していた。駅から五分とかからないし、スーパーもすぐ近くにあつてとても便利。

しかし、十松くんがリタイアして、次の仕事として選んだのがギャラリー経営だった。この、人に貸していた木造民家をそのままギャラリーにしてしまおう、というのが十松くんの発想だ。一階に台所と風呂場のほかに三部屋、二階にも二部屋ある。相当広い。

この畳敷きの部屋をそのまま、手を加えてギャラリースペースにしてしまおう、と考えたのだ。勿論、畳の部屋の根太を補強したり、スポット照明を設置するなど、ギャラリー仕様に手は加えた。逆に、掘りごたつを切った部屋は、そのまま活用。冬はそのこたつに入りながら、談笑しつつ、展示物を眺めることができるようにした。この「掘りごたつのあるギャラリー」というのは、「売り」になるよと、十松くんに力説した覚えがある。

●やることは山積み

「ギャラリー・ビブリオ」と名づけられ、オープンは九月一日と決まっていたが、その前に、広く認知させるためのイベントをしたいと十松くんは考えていたようだ。何がいいだろう。その案に乗ったのが、これがチャンスと思った私だった。これこれこう、と「羽鳥書店まつり」の話をし、ギャラリースペースに蔵書を並べて、売らせてもらえないかと持ちかけたのだ。

十松くんは快諾してくれ、三連休となる七月十四日からの三日間を開催日と決めた。

とりあえず告知のために作ったフライヤーには「岡崎武志一人古本市」と掲げ、私が本を詰め込んだフロシキを背負ったイラストがあり、そこに「もうこれが限界！ 書庫からあふれ出した蔵書を、この際一部放出することにした。三日限りの一人古本市。これはすごい。皆の衆、馳せ参じたまえ！」とセリフで言わせている。蔵書処分を、またとない場

所を得てイベント化することの興奮のため、気合いが入っている。

さて、開催までにすべきことは山のようにあった。

売べき本を選び出し、売値をつけること。搬入と開催中に販売その他を助けてくれる助っ人も募集しなくてはならない。告知を掲載してくれる媒体の交渉。本を運ぶときにダンボールが必要になる、その確保。細かいことでは釣り銭やレジ袋の用意。どれぐらい本は必要か。並べるのに、ダンボールに突っ込んだままというのは芸がない。なにかうまい方法はないか。

いざ、やると決めてから、懸案事項がわき出してきた。

(つづく)